

I-109

異種材料を接合した薄板の曲げ問題の解析

名古屋工業大学 学生員 茂籠 勇人
 名古屋工業大学 正員 長谷部 宣男
 名古屋工業大学 正員 中村 卓次

まえがき ここでは二つの異種材料の接合部が直線、それ以外は接合部に関して対称な任意の形状を考え、有理関数と複素応力関数を用い薄板の曲げの混合境界値問題の解を誘導する。そして接合線に対称な二つの異種材料半無限板が有限長で接合され、無限遠で曲げを受ける問題の解法を示す。

Riemann-Hilbert問題への定式化 物理面を表す図1(a)において $Y \geq 0$ の半平面を材料Ⅰ、 $Y \leq 0$ の半平面を材料Ⅱと呼ぶことにする。材料Ⅰを X 軸に関して対称変換すれば材料Ⅰ、Ⅱの形状は一致する。よって、 z_1, z_2 平面から t_1, t_2 平面への写像関数は同一のものを使用することができる。ここでは次式の写像関数を用いる。

$$z_j = \omega(t_j) = \frac{E_0}{1-t_j} + \sum_{k=1}^N \frac{E_k}{z_k - t_j} + E_0 \quad (1)$$

ただし $j=1, 2$ で添字は材料Ⅰ、Ⅱを表し、 $N=24$ である。図1(a)、図1(b)の境界で接合部を M 境界、それ以外を L_j 境界と呼ぶ。 M 境界で応力、変位が連続であることにより次の関係を得る。

$$\begin{aligned} MY_1 &= -my_1 \quad \int PY_1 ds = \int py_1 ds & \frac{\partial W}{\partial Y_1} &= \frac{\partial W}{\partial y_1} \quad \frac{\partial W}{\partial X_1} &= -\frac{\partial W}{\partial x_1} \\ MY_2 &= my_2 \quad \int PY_2 ds = \int py_2 ds & \frac{\partial W}{\partial Y_2} &= \frac{\partial W}{\partial y_2} \quad \frac{\partial W}{\partial X_2} &= \frac{\partial W}{\partial x_2} \end{aligned} \quad (2)$$

また、外力が作用していない境界が存在する場合には、解析接続より $\phi_j(t_j)$ は次式のように求まる。

$$\psi_j(t_j) = \kappa_j \overline{\phi_j(1/t_j)} - \frac{\overline{\omega(1/t_j)}}{\omega(t_j)} \phi_j(t_j) \quad (3)$$

外力、変位の境界条件式はそれぞれ次式で表される。

$$-\kappa_j \phi_j(\sigma) + \frac{\omega(\sigma)}{\omega(\sigma)} \overline{\phi_j(\sigma)} + \psi_j(\sigma) = \frac{1}{D_j(1-\nu_j)} \int [my_j + i \int py_j ds] dz \quad (4)$$

$$\phi_j(\sigma) + \frac{\omega(\sigma)}{\omega(\sigma)} \overline{\phi_j(\sigma)} + \psi_j(\sigma) = \frac{\partial W}{\partial X_j} + i \frac{\partial W}{\partial Y_j} \quad (5)$$

D_j は曲げ剛性、 κ_j は ν_j の関数で $(3+\nu_j)/(1-\nu_j)$ で表される。 L_j 上で二つの外力成分 $my_j, \int py_j ds$ を与える境界条件式は t_1, t_2 平面で独立に与えられる。(3), (4)から $\phi_j(t_j)$ を消去して次式で表される。

$$\phi_j^+(\sigma) - \phi_j^-(\sigma) = -\frac{1}{\kappa_j D_j(1-\nu_j)} \int [my_j + i \int py_j ds] dz = h_{1j}(\sigma) \quad (6)$$

ただし、領域 S の内部から境界上に近づいた値に $+$ 外部から境界上に近づいた値に $-$ の肩符を付している。 M 上では(4), (5)を利用することにより次式を得る。

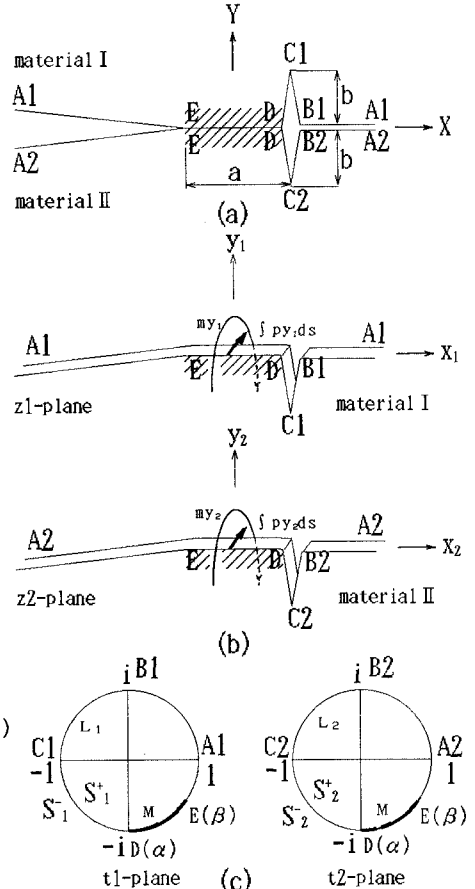


図1

$$\phi_1^+(\sigma) + \lambda_1 \phi_1^-(\sigma) = \gamma_1 g_1(\sigma) + h_{1M}(\sigma) \quad (7)$$

$$\lambda_1 = \frac{\kappa_1 D_1 (1-\nu_1) + \kappa_1 \kappa_2 D_2 (1-\nu_2)}{\kappa_1 \kappa_2 D_1 (1-\nu_1) + \kappa_2 D_2 (1-\nu_2)} \quad \gamma_1 = \frac{(1+\kappa_2) \kappa_1 D_1 (1-\nu_1)}{\kappa_2 D_2 (1-\nu_2) + \kappa_1 \kappa_2 D_1 (1-\nu_1)}$$

ただし $g_1^+(\sigma) = g_1^-(\sigma) = g_1(\sigma)$ となる任意の有理関数である。

一般解の誘導 境界条件式が(6), (7)与えられるRiemann-Hilbert問題の一般解は

$$\phi_1(t_1) = H_1(t_1) + \frac{\gamma_1 \chi_1(t_1)}{2\pi i} \int_M \frac{g_1(\sigma) d\sigma}{\chi_1^+(\sigma)(\sigma-t_1)} + \chi_1(t_1) P_1(t_1) \quad (8)$$

$$H_1(t_1) = H_{1L}(t_1) + H_{1M}(t_1) \quad (9)$$

$$\chi_1(t_1) = (t_1 - \alpha)^{m_1} (t_1 - \beta)^{1-m_1} \quad (10)$$

$m_1 = 0.5 + i \frac{\ln \lambda_1}{2\pi}$
 $\chi_1(t_1)$ は Plemelj 関数であり、 α, β は境界 L_1 と M 境界との接点 D, E に対応する。 $P_1(t_1)$ は任意の有理関数であり $\phi_1(t_1)$ の S^+ での正則条件より次式で与えられる。

$$P_1(t_1) = \frac{1}{\kappa_1} \sum_{k=1}^N \frac{\overline{A_{1k}} B_k}{\chi_1(\zeta_k)(\zeta_k - t_1)} \quad (11)$$

ここで $A_{1k} = \phi_1'(\zeta_k), B_k = E_k / \omega'(\zeta_k), \zeta_k = 1/\zeta_k$

$g_1(t_1)$ は領域内外でそれぞれ正則な項に分解し、さらに2位以上の極および正則項が最終的に零となることを考え、結局 $g_1(t_1)$ は次式のように表すことができる。

$$g_1(t_1) = \frac{1}{\kappa_1} \sum_{k=1}^N \frac{\overline{A_{1k}} B_k}{\zeta_k - t_1} - \frac{1}{\kappa_2} \frac{\kappa_2 D_2 (1-\nu_2)}{\kappa_1 D_1 (1-\nu_1)} \sum_{k=1}^N \frac{\overline{A_{1k}} B_k (\zeta_k')^2}{\zeta_k' - t_1} \quad (12)$$

荷重条件として無限遠点で曲げが作用して、それ以外の L_1 上には外力の作用しない状態を考える。よって(9)の第2項は零、第1項は次式で示される。

$$H_{1L}(t_1) = \frac{\chi_1(t_1)}{2\pi i} \frac{-M_0}{\kappa_1 D_1 (1-\nu_1)} \int_L \frac{d\sigma}{\chi_1^+(\sigma)(\sigma-t_1)} \quad (13)$$

以上より最終的に複素応力関数 $\phi_1(t_1)$ は次のように求められる。

$$\phi_1(t_1) = H_{1L}(t_1) + \frac{1}{\kappa_1} \sum_{k=1}^N \left\{ \frac{\gamma_1}{1+\kappa_2} + \left(1 - \frac{\gamma_1}{1+\kappa_2}\right) \frac{\chi_1(t_1)}{\chi_1(\zeta_k)} \right\} \frac{\overline{A_{1k}} B_k}{\zeta_k - t_1} + \frac{1}{\kappa_2} \frac{\kappa_2 D_2 (1-\nu_2)}{\kappa_1 D_1 (1-\nu_1)} \frac{\gamma_1}{1+\kappa_2} \sum_{k=1}^N \left\{ 1 - \frac{\chi_1(t_1)}{\chi_1(\zeta_k')} \right\} \frac{A_{1k} \overline{B_k} (\zeta_k')^2}{\zeta_k' - t_1} \quad (14)$$

Dundursの定義したパラメータ 解析を容易にするために上で求めた一般解を平面問題でDundursの定義したパラメータに相当する以下のものを用いる。

$$\alpha_D = \frac{(\kappa_2+1)\Gamma - (\kappa_1+1)}{(\kappa_2+1)\Gamma + (\kappa_1+1)} \quad \beta_D = \frac{(\kappa_2-1)\Gamma - (\kappa_1-1)}{(\kappa_2+1)\Gamma + (\kappa_1+1)} \quad (15)$$

$$\Gamma = \frac{\kappa_1 D_1 (1-\nu_1)}{\kappa_2 D_2 (1-\nu_2)}$$

$$\lambda_1 = \frac{1-\beta_D}{1+\beta_D} \quad \lambda_2 = \frac{1+\beta_D}{1-\beta_D} \quad \gamma_1 = \frac{1+\alpha_D}{1+\beta_D} \quad \gamma_2 = \frac{1-\alpha_D}{1-\beta_D}$$

α_D, β_D の取り得る範囲は図2に示す。ここでは対象としている形状が接合線に関して対称なので $\alpha_D \leq 0$ について考えればよい。また図2の $\alpha_D = \beta_D = 0$ の原点は材料I, IIが同一の材料の場合である。

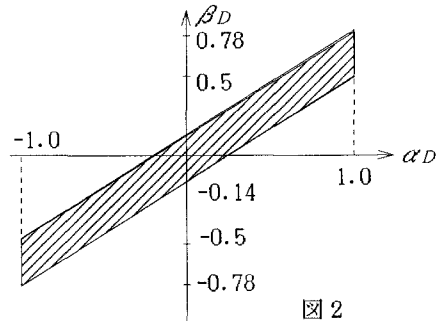


図2